

「かつ神主さま!? 困りますっ! こんなところぞ」

「大丈夫、こんな裏庭まで誰も来ないよ。」

「でも…もし誰か来たら…。」

「それに、今更隠す必要なんてないだろ? みんな知ってるよ。」

「それは…。そうかもしれませんが…。」



「それに、今日のお勤めも小鬼退治だろ？雪乃ならスグに終わるさ」

「ダメですよ、小鬼だからって油断できません、最近小鬼も力を付けてきてるんですから。」



「雪乃は心配性だなあ、じゃあ今日は止めとくかい？」

「えっ えっと…それとこれとは話が別と言うか…。」

「はははっ、雪乃はエッチだなあ。」

「もうっ、神主様の意地悪♥」

「ごめんごめん、じゃあ雪乃、そろそろ。」

「はい…♥私も、欲しくなってきたやいました♥♥」

「装束を汚さないようにしないとね。」

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ



「相変わらず雪乃のお尻は大きいなあ。」

「もうっ♡女の子にそんな事言っちゃだめですよ♡♡」

「ははっ♡めんどめんど、愛してるよ 雪乃。」

ドキッ

ドキッ

ドキ

「私も♡好きです、神主様♡♡」

「じゃあ、そろそろ…。」

「はいっ♡来てっ♡早く来てえ♡♡」



「あっ♡おおん♡神主様あ♡♡」

「うっくっ！雪乃、声が大きいよ。」

「だってえ♡神主様のが急に奥までくるからっ♡」

ズブズブ...

ゾクッ

ゾク

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ハッ

ビクッ

アホッ

「はあっはあっ、雪乃の膣内すっくいよ。」

「神主さまっ♡神主様あ♡♡」

「くっく！動くよ雪乃。」





「あぁっ♡神主様っ♡もうイキそうっ♡イきやうですっ♡」

「雪乃っ！くっ、そろそろ限界だっ！」

「はぁっ♡はぁっ♡私もうっ♡」

「イクよっ雪乃！」

「きてっ♡神主様っ♡」



「きたあ♡神主様っ♡」

「…っ…っ…」

ビクッ

ビクッ

ドビュ!

ビクッ

「んっ♡遠慮せず全部出して下さいね♡」

「はあっはあっ、搾り取られる…。」

「神主様♡膣内でビクビクしてます♡♡」

ドクン

ドクン

ドクン

ビクッ

ハッ

ハッ

ハッ

「雪乃、愛してるよ。」

「はいっ♡私も、愛してます」

「お勤めもがんばっちゃいますからね♡」





「おおっ！お前が噂の巫女か
グフフッ、噂通り男好きのする体をしておる。」

「出たわね、汚らしい悪鬼めっ！
この光の巫女が滅してあげるわ！」

「その口ぶりだと、私に来ることは察していたみたいね。
私をお持ち帰りでもするつもりだったのかしら？
でも残念ね！アంతはここで消滅するのよっ……！」

「グフッ！随分と威勢がいいなあ、
まあ、そのくらい威勢がいいほうが堕とし甲斐があるがなあ！」





「ゲフフ…、もう遅いわ、お前はもう我が術中にはまっております。」

「なっ、なにっ!? これは、妖術!」
「こんな小鬼が妖術を使うなんてっ。」



「グフツ、無駄無駄 その妖術は
たとえ光の巫女と言えどもそう簡単には解けぬよ。」

「くうっ！面妖な術をつ！
こんな術すぐに解いてやるんだから！」



「やれやれ…、ねぐらに持ち帰るにしても
もう少し大人しくさせねばいかな…。」

「それ以上近寄るなっ！汚らしい鬼め！
少しでも触ったらただじゃおかないんだから…！」



「はあっはあっ、力が抜ける…
力が吸い取られてる…。」

(グッ、このまま吸い尽くして
大人しくさせてやろう)

「くっくっ！やめてっ！
誰かっ！誰か助けてっ！」



「ぶっぶっぶっぶっ！」

だめっ、意識が…もう…。」

(なかなか頑張るな、

だが、それもここまでのかな、グッ。)

「はうっ…ゆる…さにやい…だからあ…

あっあっ…乳首離せえ…。」



「あっ…あっ…あん、
神主様…私…もう…」

(神主?「やつ」の男が、
残念だがお前がその男に会うことはもうない。)

「こんなヤツに…負けるなんて…」

ハッ

ハッ

ピクッ

ピクッ

ハッ

ピクッ

ギョル

ギョル

ああ…神主様、ごめんなさい…。



「どうだ巫女よ、そろそろ素直になってくれんか？」

「くっ！だまれ！力が戻ればお前なんて一瞬で浄化してやるんだからっ！」

ズポ。

ズポ。

びん

びん

びん

びん

びん

びん

びん

「わい！わい！じゃが体のほうは喜んでいゝよっじゃなっ」
「とんだ自意識過剰だわ、哀れな小鬼め」

「毎晩あんなによがり狂っておるのに、大した精神力じゃなあ。」

「ハア？あんたが勝手に情けなく腰振ってるだけじゃない、
独りよがりな妄想はやめてよね。」

「グフフ、その威勢もきょうまでよ

今日お前はワシのモノになる、必ずな。」

「ありえないわ、絶対お断りよっ！」

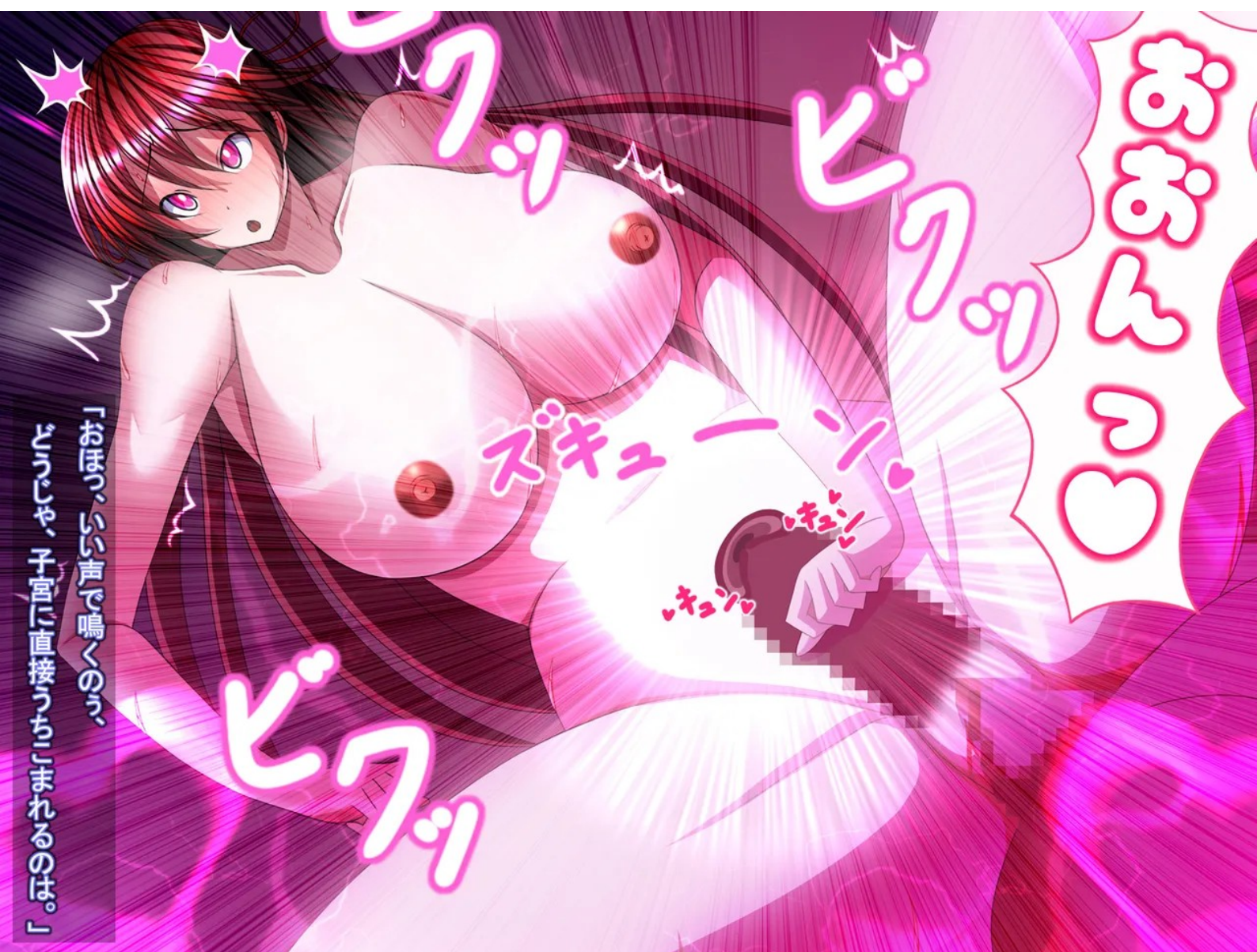


「うん！負けないっ、お前なんか絶対屈服しないわ！」
「グフツ、健気だなあ巫女よ、だがそれも今夜までよ、
昔の男への未練をわしが断ち切ってやるっ！」

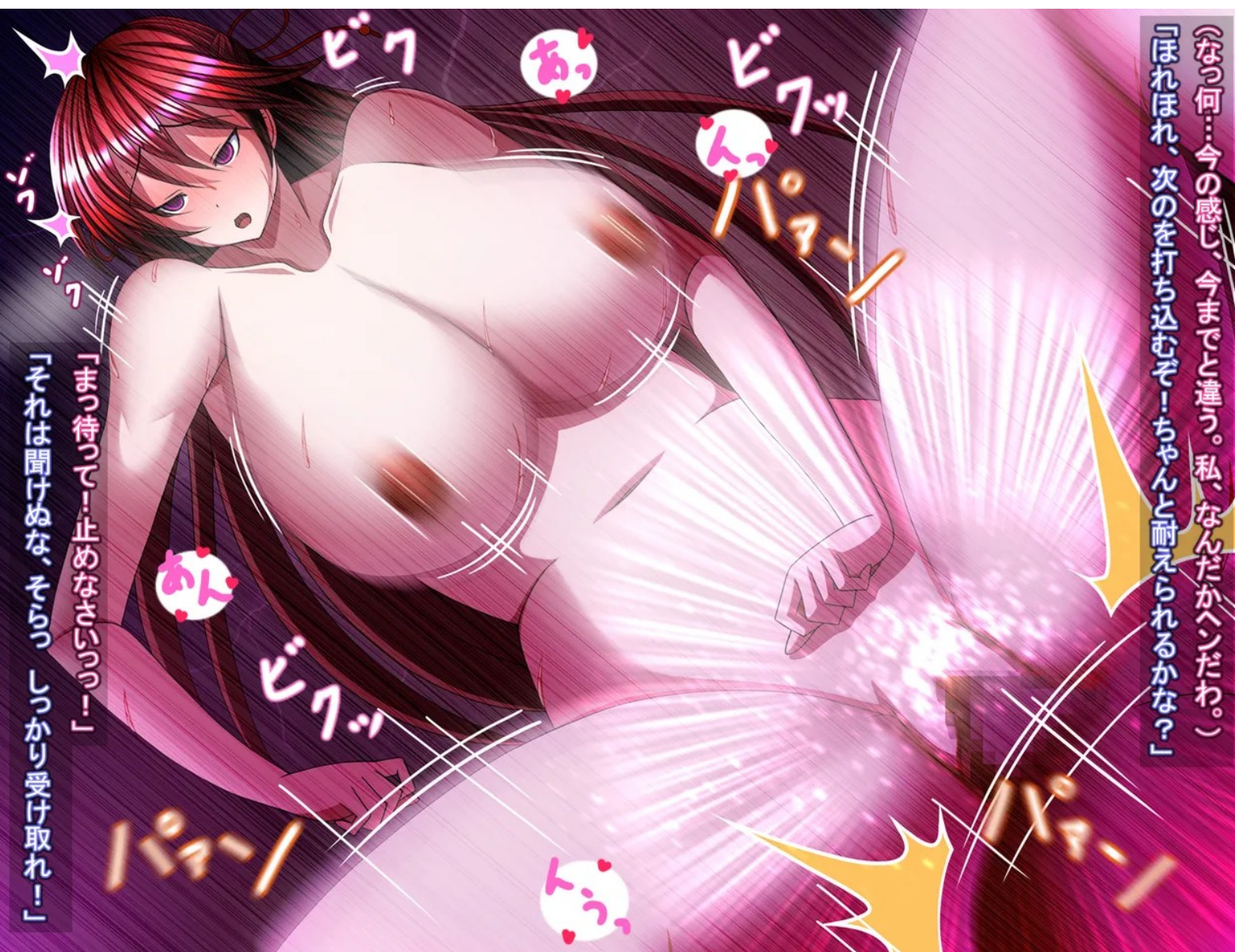


「何をするつもりなのっ！」

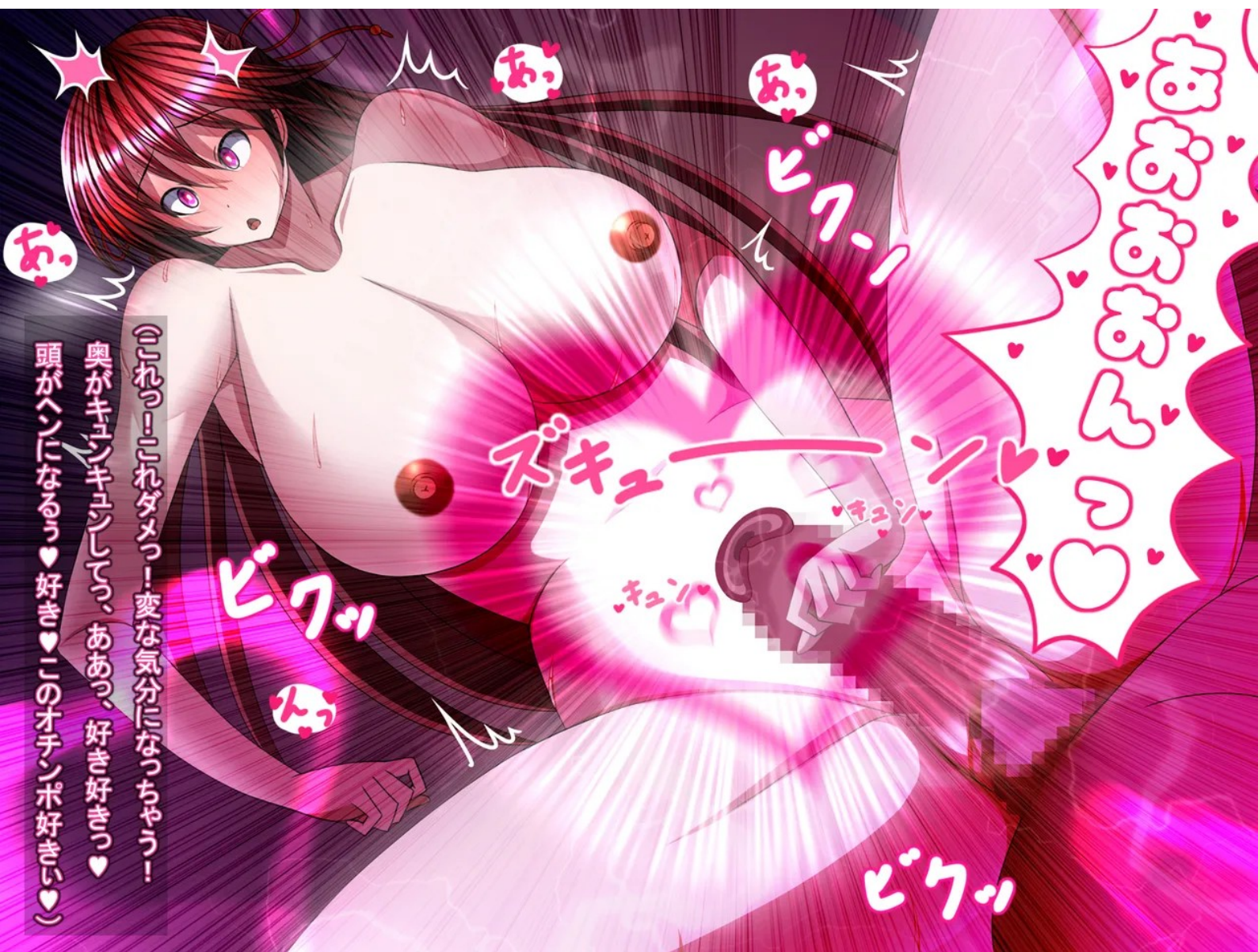
「とっておきの妖術をくれてやるっ！」



（なっ何…今の感じ、今までと違う。私、なんだかヘンだわ。）
「ほれほれ、次のを打ち込むぞ！ちゃんと耐えられるかな？」



「まっ待って！止めなさいっ！」
「それは聞けぬな、そらっ しっかり受け取れ！」



「これっ！これダメっ！変な気分になっちゃう！」

奥がキュンキュンしてっ、ああっ、好き好きっ♡

頭がへんになるう♡好き♡このオチンポ好き♡

「わしのも結構悪くないじやろ？な何とか言ってみい？」
「何なの」の感覚、頭がフワフワして…拒絶できない…。」



「夜はまだまだ長い、しっかり愛し合おうではないか。」

「待って…」これ以上されたら私本当「っ…」

「このっ！離してっ！妖術を解け！卑怯者っ！」
「ほう、まだ完全には堕ちぬか。さすが光の巫女。」

（このままじゃマズいわっ！なんとか振りほどかないとっ。）
「しかたがない、次はもっと強めに打ち込んでやる！」



「さあ、ワシの眼を見ろ。抵抗などせず楽になれ。」
(体がっ！いうことを聞かない！声も出せないっ！)

「よしよし、いい子だ。このままワシに身を任せるのだ。」
「あっ……う、や……めて……、あっ……。」

キィィィー



「おっ？締め付けが強くなってきたな、やっとその気になってくれたか。」
「っ！ちがッ！違う！……これは妖術の……せいなんだからあ。」





「あつ……待ってっ、奥はっ！奥はダメになっちゃうからっ！
優しく、優しくしてっ……」

「そうかそうか、では優しくじっくり愛してやるからな。
（ごめんなさい…神主様、私もう 耐えられないの…。）」



「^{なか}膣内につ^{なか}！膣内に出してっ！」

「ようやく素直になったな、よし、しっかり受け取るのだぞ。」



「んっ！熱いのが♡熱いのが出てるっ♡♡」

「うぐっ！吸い取られるようだ。つく、全部しっかり受け取れ！」



「はぁ♡はぁ♡スゴイ…♡まだ出てる…♡♡」

ハ?

ドキ

ハ?

ドキ

ハ?

ドクン

グッ

グッ

「はぁ、ワシもこんなに出したのは初めてじゃよ、
やはりお前は最高の女じゃ。」

「えっ♡私が…最高…? 本当に?」

「ああ、本当じゃとも、愛しておるよ巫女よ。」

「ダメよ…そんなの…、でも、優しくしてくれるなら…私…。」



「ちよつとっ!」こんな獣みたいな態勢嫌なんだけどっ!」
「ふーむ、まだ少し、情緒不安定じゃなあ。」

「?」なんの話よ?、とにかく普通に愛して!」
「次は少し厳しめに行くとするかの。」



「あっ♡待って♡優しくしてくれらって、言ったのに♡」
「自分の立場を分かっておらんようじゃなあ。この雌犬めっ!」

「あん♡激しい♡奥がっ、オマン」壊れちゃっ♡♡
「このままワシ専用の穴に変えてやるぞっ!」



「嘘つきー優しくしてくれてるって、愛してるって言ったのにー」
「グフフ、嘘なんかじゃないさ、心から愛しておるよ。」

「ちゃんと示してー優しく愛して気持ちよくしてー」

「注文の多い助兵衛娘じゃのう、仕方がない、優しくしてやるかの。」



「これでどうかの？ 巫女殿」

「んっ♡そっ♡♡好きっ♡突いてっ、奥突いてえ♡♡」

「くっ！急に膣内がウネって…もう出そうだった！」
「あんっ♡優しく奥に接吻されるのすき♡♡♡」





「……んん……んん」

「あつ待って！私まだっ！」

「むー、私ももうちょっとでいけたのに…。」
「いやあ、すまぬな、巫女殿の膣内があまりにも名器だな。」

「ばっ、バカ！なに言ってるのよーそれよりもっ、
まだ できるよね？私も…その…。」

「心配しなくても、ちゃんと満足させてやるとも。」

「んっ♡優しくしてね♡」





「ねえ、今日もするでしょ？いつもみたいに
ちゃんと奥まで愛してほしいな♡な～んて♡」

「グフツッ！」らら、はしたないではないか。」

「も～、今更そんな事言わないでよ♡毎日見てるくせに♡♡」



「そんなことある筈ないじゃろ？
お前の身体は最高じゃよ、機嫌を直しておくれ。」

ミッ...

「ねえ、今日ちよつと焦らし過ぎじゃない？
それとも、私の身体...飽きちゃった...とか...？」

「そう、そうだよねっ！私が最高の女だもんねっ！
えへへ、変な事いつちやって「めんね♡私も愛してるよ♡」

「グフフ…、もう心は完全に堕ちたな。

後は最後の仕上げに、完全な鬼となってもらおう。」

ジクッ...





「よしよし、ニミがいいんだな。しっかり押さえておくんじやよ。」

「あっ♡これ、私もイかも♡カリが引つかかって
そっ♡上のほう引っ掻いてえ♡♡」



「おふっーワッもそろそろ限界じゃー！出すぞー！膣内に出すぞー！」

「あっ♡「めんなさい、私もう飛んじやいそっ♡
もう全然余裕ないの♡一緒に、「一緒にイ」っあん♡」



「ぐっ、これは堪らんっ！腰が抜けそうじゃー！」

「あっ♡熱っ♡すこい、膣内でビクビク脈打って
出して、全部 膣内に出さきってー！」

「はあ♥毎日こんなに愛されたら、授かっちゃうかもっ♥」
「ワシみたいな小鬼の子を孕むのは嫌じやろ?」

「もうっ♥昔のことは忘れて? ねっ? 私アナタじゃないともうダメなの♥」

「グフフ、すっかり雌の顔付きになってきたな。」

「私、ずっとエッチ我慢してたの。巫女だから…」

でも、もうそんなのどうでもいいからっ♥毎日交尾してっもっ♥愛してっ♥」



「んっ、あれ？私どうしちゃったのかな…。」

「大丈夫？雪乃、ポーっとしてたけど。」

「神主様？そっか私帰ってきたんだ。」



「何でもないんです、神主様。気にしないでください。」
「そう？動いでも平気かな？」
「ええ、どうぞお好きなようになれってくださいな。」



「んっ、どうですか神主様？気持ちいいですか？」

パチュ

パチュ

「ああ、最高だよ雪乃。熱くてキツくて、うっ！」

「ふふっ、いつもみたいに我慢しないでいいですからね？
いつでも臍内に出してくださいね♡」

ピクッ
ん

ピクッ



「はっはっはっ！」

「あんっ♥もう出ちゃったんですか？
仕方ない人ですねえ。」

「ごめん！雪乃の膣内気持ちよすぎて…」
（私、もうちよっとしたかったな…）



「えっ！あれえ？♥私今どうしちゃってたんだろ」

「どうした？昔の男でも思い出したのか？」

「もう、変な術使ったでしょ？♥

イタズラはダメよ♥エッチなのは歓迎だけど♥」

「ゲッフ、そうかそうか、では期待には応えねばな。」



「昔の男が忘れられないのは」の穴か！
まだ忘れられないのか！」

「あっ♡ああん♡もうっ もうアナタの穴です！
アナタだけのっ♡アナタ専用のオマン」ですっ！♡」

「よしっ！じゃあ遠慮なく仕込むぞっ！いいなっ！
「はいっ！♡仕込んで！孕ませようっ♡♡♡」





「あっ♡出してっ！全部！」

「うっ孕めっ！孕めっ！」

「ふう、射精が止まらんわい。さすが巫女マンコじゃなあ。」

ハッ

ドキッ

ビュッ

ビュッ

「雪乃って呼んで♡私の名前♡」

「おおーそうか！雪乃か、いい名じゃな。」

「私も、その…旦那様って呼んでいい…？」

ハッ

ドキッ

ハッ

「いいともいいとも、雪乃。」

「ああっ♡うれしい♡旦那様あ♡♡♡」

♡キゅん♡

ドキッ

ハッ

♡キゅん♡

ハッ



「んっ、旦那様、大丈夫ですか？重くないですか？」
「なんのなんの、軽すぎて心配なくらいじゃよ。」



「旦那様♥私もう自分が抑えられない！もっともっと深く繋がりたいのっ！」
「我慢することはないんじゃないやよ？全部受け入れて、全部曝け出しなさい。」

「はあっ♡旦那様♡旦那様あ♡好きっ♡大好きっ♡
もっと愛してっ♡んっ♡私のモノっ誰にも渡さないっ!」

「いいぞいいぞ、雪乃 もっと自分を曝け出せ!欲望を爆発させるんじや!」

「あああああっ♡♡もっと欲しい!全部ウ!♡ゼンブワタシノモノ
アオオオ♡オンツ♡オンツ♡オチンポ♡スキスキスキ♡アアアアア♡」
「よし!そのまま受け入れるんじや、欲望を!肉欲に身を委ねよ!」





「ふっふっ…ふっふっ…すっ…すっ…力があふれる…」

旦那様っ！私 怖い、どんどん変わっていったやうっ…」

「安心なさい、お前のあるべき姿になるだけじゃよ」

「私の、あるべき姿…？それが旦那様の望み？」

「ああ、お前の美しく変わった姿を見せておくれ。」



「はぁ♡あはぁ♡旦那様♡なんだか私、今とってもいい気分♡
もう旦那様以外の」となんてどうでもよくなっちゃった♡♡」

「よく耐えたな雪乃、さすがはワシの選んだ女じゃ。」

「これが鬼の身体♡なんて素晴らしいの♡♡
これならいくらでも子作りできそう♡何人でも孕めそうです♡♡」
「これこれ、そう焦るでない。身体も変わったばかりではないか。」





「旦那様あ♥私は大丈夫だからあ♥もっと愛してほしいな♥
人間だったころよりムラムラしてえ♥私もう我慢できないの!♥」
「グフフ、相当我慢しておったんじゃないなあ、まったく、」のドスケベ娘め!」

「早くっ♡このドスケベ娘に嬉しいのブチ込んでほしいのっ♡愛おしすぎて
もう気が狂いそうなの！ああっ♡旦那様への気持ちが抑えられないのお♡」

「鬼は性欲も愛憎も人間の何百倍もあるからう。
変化してスグは性欲が強くて辛からう。」

「マンコがっ、子宮が切ないの♡早く満たして♡グチャグチャに愛してっ♡
壊れちゃうくらい激しく突いてっ！グチャグチャにしてえ………♡」





「あっ♡アっ♡来たあ♡旦那様っ♡旦那様あ♡！これっ！
これが欲しかったのっ♡このオチンポが欲しかったのおっ♡」

「これこれ、興奮するでない。奥まで入らぬではないか。」

「グフッ、これが欲しかったんじやろ??どうじゃ、気持ちいいか?」



「あっ♡イイっ♡すくイイですっ♡そのまま奥をっ
奥を突いてっ!感じるっ♡奥が感じるのっ♡♡」

「ホッっ！ほれっっ！どっどっどっ！そっそっ！けっ！さっ！かっ！」



「んっ！♡はいっ♡いきまっすっ！旦那様のオチンポでっ
私 鬼の初アクメきまっすっ！♡♡」

「グフフッ、元気な子を孕めよ、雪乃。」



「はいっ！♥孕みますっ！いきながら孕みますっ！
元気な赤ちゃん孕みますっ！……！……！♥」

「グフフっ、出来るといいのお、雪乃や。」



ドキッ

ドキッ

モワァ〜

ハ?

トピッ

トピッ

ハ?

ハ?

ハ?

「はいっ、旦那様♥私ががんばりますから、旦那様の為にがんばって孕みますから♥」

「はいっ、旦那様♥私ががんばりますから、旦那様の為にがんばって孕みますから♥」

～数ヶ月後～



「あの、旦那様？聞いていただきたいことがあるんです。
とっても大切な事なんですけど。」

「ふむ、どうしたんじや？改まって、わしら夫婦の仲じゃないか
遠慮せずに言ってみなさい。」



「ふふっ♡私、旦那様の赤ちゃん、授かりましたっ！
二人の赤ちゃんですから、きつととってもエッチな子ですね♡」



「なっ！何っ！ワシの子がっ！っ！っ！……」

「きゃっー！旦那様っー！いつもよりすっごい射精。」



「うっくー！あまりにも嬉しくて興奮して、出してしまった…。」

「そんなに喜んでくれるなんて、私もうれしいです♥
頑張つて産みますから、大切に育てましょうね♥
好きです 旦那様…愛してます♥♥」

ドロォ...

「ああ、雪乃 ワシも愛しておるよ、これからは体をいたわらんな。」



それから更に数年の時間が流れた…

ある頃から、都近郊の荒れ寺に鬼の一家が住み着いた。
美しい雌鬼と、醜い雄鬼、そして可憐な子鬼、退魔士が幾人も戦いを挑んだが
ことごとく返り討ちに遭い、遂には戦えるものは居なくなった。
戦いを挑んだ退魔士の一人が、雌鬼を「雪乃」と呼び戦いを拒んだが、
怒った雌鬼に引き裂かれて無残な屍となった。
彼がなぜ雌鬼を「雪乃」と呼んだのか、数年前に失踪した光の巫女
がどこへ消えたのか、今となっては知る者はいない…。















































